関東地域版

森林・林業・木材産業の発展に寄与

300強の小間数で木材の可能性広げる

WOOD コレクション(モクコレ)2026

東京都が主催した「WOOD コレクション(モクコレ)2026」が12、13の両日、東京ビッグサイト(江東区)で盛大に開催された。39都道府県、320出展者、314小間の広大なスペースに2日間で7100人を集めた。各種製品のほか、セミナーや展示を盛り込んで木材の可能性を広げるイベントとなった。開催期間中は北から南までの各主要産地の木材供給力や森林認証材といった山側の取り組みから、構造・内装・建具材、家具・木工など多様でこだわりのある各種製品の展示・提案が行われた。今回は来場者と出展者のビジネスマッチングもあり、商談件数は490に上り、森林・林業・木材産業の発展につながっていく内容となった。主な出展企業や団体に見どころなどを聞いた。なお、モクコレ2026の「オンライン展」は、あす27日まで開催している。

内装材のワンポイントになぐり加工パネルを展示

フォレスト西川

フォレスト西川(埼玉県飯能市、新井銀平社長)は、国産材活用の観点から地元西川材と東京の木多摩産材を利用した新製品開発に取り組んでいる。今回のモクコレでは、埼玉県飯能市森林認証協議会のブース内で、幅はぎ材を使用した「なぐり加工パネル」を展示した。

幅はぎ材は、一般的な集成材とは異なり、長さ方向の継ぎ目がなく、一枚板のような自然な風合いが特徴。板目や柾目の木目の表情を選ぶことができるため、空間の雰囲気に応じて家具材、建具材、カウンター、棚板などの用途に使える。また、なぐり加工は、木材の表面に「ちょうな」や「突き鑿(のみ)」などの大工道具で独特の削り跡を付ける日本の伝統的な加工技術で、現在ではNC加工機を駆使し、さまざまな模様を加工することができる。

同社は、桧・杉材の柾目の幅はぎ材を使用し、「いしがき」「かりまた」「きっこうなぐり」「みなも」「おびのこ」の5種類の加工形状を用意している。実形状は相じゃくり形状で、突付・目透かしの両方に対応する。

新井社長は「ムク素材の美しさに、平滑仕上げとは異なる陰影を重ねた高級感が楽しめる。内装材として壁や天井材に使用すれば空間全体が格調ある雰囲気になる。空間のアクセントとして、寝室のベットサイドや玄関の正面など、全面でなくワンポイントで使うのもお薦め」と話した。

かりまたときっこうなぐりを展示した

特殊加工機で木造躯体展示

テクノウッドワークス

テクノウッドワークス(TWW、栃木県鹿沼市、早川孝男社長)は、栃木県ブースに出展し、同社が複数所有する木材加工機で、具体的にどういった構造躯体が組み上がるかを視覚的にPRした。

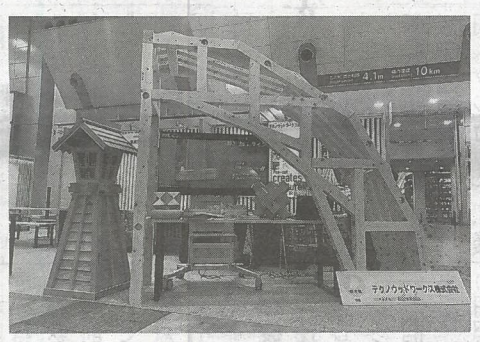
同社は今回が初出展で、県産材(杉・桧)を活用した構造躯体や灯篭、木工品などを展示した。

躯体は非住宅木造を意識したもので、構造材のプレカットと継ぎ手を工夫することで、R状の曲面仕上げにできる意匠力を提案した。使用した木材はすべて県産桧材で、接合部に金物を用いており、開催日に合わせて同社社員が会場内で組み立てた。躯体寸法は高さ2440×幅1645ミリ。

栃木県のブースにはゼネコンや設計事務所、プレカット会社などが幅広く訪れた。同社では設計事務所には4号特例見直しに関連して同社が手掛けた物件集を配布したり、非住宅特殊物件の加工内容や建て方対応地域(条件により北海道から奄美大島まで実績)を説明したりした。

また特殊加工機とCADで製造できる事例として、木製チェーンソーや同パズル、灯篭なども展示した。灯篭は機械加工と手加工を融合したものになる。

同社は今回、来場者からの手応えを得ており、「来年も出展に向けて前向きに検討したい」(TWW)と話している。



左から灯篭、木造躯体。テーブルには木製パズルなども展示した

石川県産広葉樹を使った家具を公開

かが里山リバース

かが森林組合(石川県小松市、片山健二代表理事組合長)は、「かが里山広葉樹活用コンソーシアム(愛称:かが里山リバース)」で開発した家具などを展示した。

かが里山リバースは、南加賀地域に分布する広葉樹を家具などの用途で活用するために、同組合や行政機関、公立小松大学、フルタニランバー(同金沢市、古谷隆明社長)などが参加し、昨年3月に設立した(25年4月2日付6面既報)。

今回は石川県内の家具職人などと連携して、開発した家具などを、作家との協力や営業を担っているフルタニランバーのブースで展示した。展示した家具や昇降デスクやシェルフ棚のほか、加賀友禅を座面に施したスツールや金沢市の伝統工芸品である金沢仏壇といった県内の伝統工芸とコラボした商品もあった。

今後はデパートなど商業施設でも展示し、将来的には加賀温泉にある旅館などと連携した展開も目指していく。

南加賀産の広葉樹を使った家具(右奥にあるのは能登ヒバのバスタブ)

杉の粉入れたフィナンシェを限定販売

岸田木材

岸田木材(富山県氷見市、岸田真志社長)は、富山県産杉の粉を混ぜたフィナンシェを会場限定で販売した。

同社は地元産杉を使った独自商品の開発に力を入れている製材メーカー。杉の粉を使った万年筆用インクやアロマウォーターなど、自社で直接一般消費者に向けて販売できるような商品の開発に力を入れている。

富山県ブースで自社製品を展示するなかで、少しでも来場者に興味を持ってもらおうと販売したのがこの「フォレストバターフィナンシェ」。杉の粉を練り込んだ生地にチョコレートを重ねて作ったこのフィナンシェは、富山市にある菓子店「エフテレット」が製造した。エフテレットは、以前にも木粉を混ぜたクッキーを製造した経験がある(24年12月26日付5面既報)。

フォレストバターフィナンシェ

伐採木、支障木を有効活用

フロンティアジャパン

フロンティアジャパン(東京都、額賀泰尾社長)は、ウッドデザイン賞2025を受賞した「伐採木活用による新たな都市型林業ビジネススキーム」をパネル展示した。

同社は、企業向けノベルティーグッズの製造・販売を皮切りに、OEM・販売商品の開発、さらに端材や廃材などを粉砕し、木粉樹脂にしてアップサイクルするなど、多彩な事業を展開している。

そのノウハウを活用し、今回、環境配慮と企業価値向上を両立する都市型林業モデルを目指した。現在、都市部では街路樹や公園樹の管理・再整備によって発生する伐採木や支障木などの有効活用が課題となっている。一方、企業、行政、学校などではSDGsやサステナビリティーへの意識は高まっており、多角的な視点から木材の再利用が注目されている。

こうしたニーズに対応し、調査・運搬・加工・商品化・納品までワンストップで対応。伐採木を地域内で循環させることで、廃棄物の削減と環境負荷の低減に貢献し、各地の製材所や加工所に新たな収益と雇用が生み出され、地域活性化につながるというもの。

企業、行政、学校関係の導入事例には、工場内の森から発生したサクラ、杉を活用したグッズ(本田技研工業)、街路樹のサクラの高齢木を木粉化し、成型したタンブラー(品川区役所)、ヒマラヤ杉を活用した置き時計(慶応義塾大学)、学内の多様な樹種を活用した天井ルーバー(玉川学園)、学内のヒマラヤ杉を活用した印鑑ケース(明治大学)などがある。

東京都のブースでパネル展示した

木造応急仮設移動式小屋の実物を展示

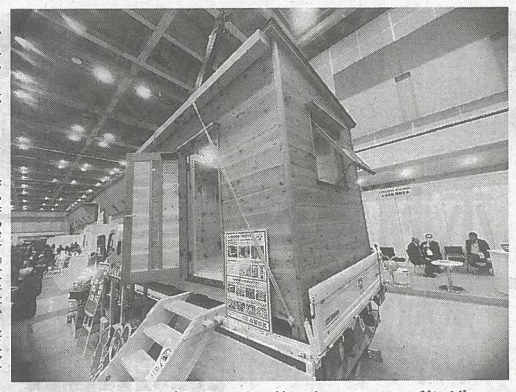
大阪府木材連合会

大阪府木材連合会(大阪市、津田潮会長)は、「ONE OSAKA」として8社・団体で出展した。

大阪産材を活用した木材製品の展示や、特徴的なご神木の設置など、木材需要の喚起に向けた連携展示を実施した。特に25年の大阪・関西万博以降も持続可能な木材利用、緑豊かな大阪を目指して、「まちをもりに―森と共に生き、森を活かす都市・大阪」をキーワードに一丸となった取り組みを進めるなど、活動範囲を広げている。

今回、ONE OSAKAとして参加したのはモリアン、恩加島木材工業、スークカンパニー、かねひさ、大阪塗料工業、山の出前一頂(南河内林業・東野材木店・藤木工務店)、大阪府みどり公社、大阪府木連。

なかでも、かねひさ(大阪府岸和田市、久々山大樹社長)は、参画しているウッドトランスフォーム・プロジェクトの木造応急仮設移動式小屋(ウッドトランスポーター)の実物(幅1900×長さ3700×高さ2400~2700ミリ)を展示した。同小屋は、国産材(桧・杉)を手刻みで加工しパネル化しているため、組み立ては大人6人なら比較的短時間で完成できることを紹介。壁や天井には羊毛の断熱材を使用し、窓や扉もあるため快適で休憩所や避難所としても活用できる点をアピールし、来場者の関心を集めた。


かねひさがトラックで運んだ「木造応急仮設移動式小屋(ウッドトランスポーター)」

恩加島木材工業(大阪市、山下喜代次社長)は、国産材不燃練付板1(メジロカバ、カバサクラ、クルミ、カラ松、ケヤキ、ニレ)や、天然木練付不燃板有孔化粧板、天然木練付スリット有孔化粧板などを出品し、国産材の幅広いラインアップを紹介した。